

北海道 みなとまち紀行

江差編①

第11号

■江差編①

桜の花が満開の江差町を訪れました。江戸時代、松前・箱館とともに松前三湊^{そう}といわれ、「江差の五月は江戸にもない」とその繁栄^{うた}ぶりを謳われ、商人文化が花開いた港町です。最初に、江差港が栄えるきっかけとなった上ノ国町の勝山館跡からスタートし、江差町に移動してかもめ島→開陽丸記念館→江差追分会館・江差山車会館→いにしえ街道沿いの旧中村家住宅^{うばがみ}→姥神大神宮を回るコースです。

【勝山館跡、勝山館ガイダンス施設】

松前氏の始祖である武田信広^{えぞがしま}は、蝦夷島の支配権を持つ主君の下北半島^{たなべ}田名部の安東政季^{まさすえ}とともに享徳3年（1454）に渡島半島に渡り、主君が蝦夷地を離れた直後に勃発したコシヤマインの戦いで辛うじてアイヌに勝利し、その貢献によって花沢^{だて}館の館主・蠣崎季繁^{かきざきすえしげ}の娘婿となって家督を継ぎました。そして蠣崎季繁が没すると勝山館を築城して蝦夷島支配の第一歩を踏み出します。

その「勝山館跡」を訪ねて、道南の上ノ国町にある標高159m^{いおうざん}の夷王山の山頂近くにある「勝山館ガイダンス施設」を訪れました（地図①②）。



「勝山館ガイダンス施設」に展示された勝山館の模型



武田信広を祭る「夷王山神社」(左)と「夷王山神社」の鳥居(上)

施設内部の中央には勝山館の模型がおかれ、その隣のコーナーでビデオによって勝山館の歴史を知ることができます。施設から少し急な坂を5分ほど登ると、そこは展望が開けた夷王山頂上。武田信広を祭神とする「夷王山神社」と鳥居が建っており（地図③）、日本海を臨み約8km北の江差港を遠望できます。山頂を後に坂を下り、施設を横に見て北西斜面の急な坂を下り空堀の深い溝に架かる木造の橋を渡り砦の中に入ると、道の両側に平坦にならした幾重もの段が海に向かって連なる場所に着きます。客殿や住居の跡地です。ここは勝山館の内部で、長さ約600m、面積35haにわたる山城です。約200棟の掘立柱の建物、約100棟の竪穴建物が立ち並び、砂鉄や鉱石から金属を取り出す精錬・精錬鍛冶^{かじ}が行われており、単なる城館ではなく、中世都市の様相を呈していました。発掘された陶磁器類約4万3,000点のうち最も多い碗や皿は中国製の青磁・白磁・染付と、本州の瀬戸・美濃大窯の製品であり、交易の盛んであったことがうかがえます。その交易港としては、夷王山の眼下を流れる天



勝山館の内部。客殿や住居・倉庫などが立ち並んでいた



海側の橋から見た勝山館の入口

ノ川の河口も利用されていたでしょうが、交易船が出入りできる川幅や水深を有しないことから、そこより北に約 8km 離れた江差湊が重視されたと推定されます。江差湊は、かもめ島によって日本海の荒波から守られた天然の良港でした。事実、

昭和 52 年(1977)、江差港内に埋没していた交易船から、積荷と推定される約 200 点の古陶器、古銭等が引き揚げられ、その中から中世の古陶器、渡来銭、白磁・青磁の渡来陶器等が発見されています。

勝山館と江差の関係はさらに続きます。信広の息子・蠣崎光広みづひろの時に勝山館から松前大館に拠点を移します。その 3 代あとの慶広よしひろの時に、豊臣秀吉から朱印状を受けて安東氏からの独立と蝦夷地支配を認められ、さらに秀吉没後の慶長 4 年(1599)に大阪城で徳川家康に拝謁し、臣下として従うことを表明し、その時に蠣崎から松前の姓に改めました。政治の中心は松前に移りますが、勝山館は西の守りの要として慶長年間(1596～1615 年)まで、少なくとも 130 年存続します。その後、西の守りを担ったのが江差です。

【ニシン漁と北前船で栄えた江差へ】

松前藩は、蝦夷島を和人が住む和人地とアイヌが住む蝦夷地とに区分しました。さらに和人地を城下福山(西原口～東福島)、東在郷(知内～亀田)、

西在郷(上ノ国小砂子～熊石関内)の 3 地域に区分し、東在郷は箱館、西在郷は江差に奉行を置いて地方行政を行うこととし、寛永 7 年(1630)に福山(松前)、江差、箱館の各港に沖の口役所を設置しました。

松前藩草創期の財政は砂金と江差地方の檜ひのきに支えられていました。この檜はアスナロ、俗に檜葉ひばと呼ばれるもので、それが生育している山を檜山と呼んでいました。松前藩は慶長元年(1596)に上ノ国に檜山番所を設置し、西在郷の檜山管理と行政の要としていましたが、延宝 6 年(1678)に厚沢部山そまどりの杣取(木材の切り出し)の許可に伴って番所を江差に移し、沖の口の業務も総括させました。江差湊は檜山伐採の根拠地として活気を呈します。江差奉行の主な業務は、沖口掛(沖の口役所の実務)、町方掛(江差市中の行政)、在方掛(西在郷の行政)、山方掛(檜山管理と藩の山林行政全般)でした。奉行は藩の上級武士の 3～4 名が任命され、江差に出向して数カ月勤務する交代制であったため、実務は江差問屋が地役人として執行する、いわば商人の自治体制でした。その体制は享保から寛保時代(1716～1744 年)に完成します。公的に江差問屋と呼ばれる商人は、問屋株を所持する株仲間、機能上からは一般問屋の概念である船宿の機能(船宿と倉庫等)と荷受・荷積問屋機能に加え、沖の口役所の公的業務である出入国船を掌握して入港税を徴収し、出入国商品に課税し徴収する藩務の代行者で、藩政と完全に結合した特権御用商人でした(「江差港沿革史」)。この委託業務によって商品流通機能を完全に掌握できる特権を利用し、江差問屋が私的企業として多角的な経営に乗り出す時期は、北前船の活躍期でもありました。ここに江差特有の文化が育まれることになります。

また、松前藩は場所請負人を福山城下に、また新興箱館商人の場所請負人は箱館に居住させていました。さらに場所請負人が松前国人別にんべつ(松前国に籍を持つ住人)に入らない場合には、地元である福山、箱館の廻船問屋を身元保証人にしていました。それに対し、江差湊は北前船の根拠地であり、追鯨おいにしん(和人地を超えて蝦夷地でニシン漁を行うこと)

を行う漁業者の基地でもあったのです。そこに、箱館や松前と異なる江差独特の文化を生み出す土壌があったのです。

元禄年間(1688～1704)以降、商品作物の奨励により鰯、鯨など魚を乾燥して肥料とする干鰯^{ほし かつ}の需要が急増して鯨の商品価値が高まり、北前船の勃興によって松前藩の最盛期を迎えます。江差商人の買積船(北前船)の先駆者は岸田三右衛門と見られ、次いで地場商人や問屋が経営に乗り出し、北前船の最盛期を迎えます。江差市中の北前船を営する商人の店は優に 30 軒、就航する北前船は 200 隻余り、蝦夷地の通い船である中遣船^{なかやりのぶね}、小廻船を加えると 1,000 隻に近かったといわれています。また、南部、津軽、庄内、秋田等の地方より古宇^{ふるう}(現・古宇郡泊村及び神恵内村)、積丹、美国、小樽等に追鯨する漁業者や商船が寄港し船改めを受けたので、その全部の貨物を集散して商業の中核となりました。港内は船舶が輻輳^{ふくそう}して殷賑^{いんしん}を極め「江差の五月は江戸にもない」とまで謳われました。その繁栄する江差の佇まいは、^{たたず}「海岸線に沿った道路の両側や山の上の商店街には軒を接して大小の商家が立ち並び、定紋を染め抜いた暖簾^{のれん}、定紋を付けた日よけの簾^{すだれ}に格子戸、瓦屋根と石置き屋根と白壁の土蔵が見える市街地、鷗島に守られた港内には



「かもめ島」と江差港。左から、いしえ街道(旧国道)、国道 228 号、左上に江差港マリーナ、開陽丸、中央に北ふ頭と離島フェリー、右手前は開陽丸が発見された東外防波堤:平成 5 年(1993 撮影、江差港湾事務所提供



瓶子岩と鳥居

ともづな 縄(注釈:船を陸につなぎとめる船尾にある綱)を接して千艘に余る弁財船が並び、林立する帆柱が水面に影を落とす」(「江差町史第六巻通説二」)と描写されています。

【かもめ島】

江差が港町として栄えた大きな要因は、町の中央から突き出た津花埼^{つばなさき}の沖にある海拔 20m、周囲 2.6km の「かもめ島」が、波を防ぎ静穏な泊地を守っていたからにほかなりません(地図⑤)。当時は弁天島と呼ばれていました。江戸時代の港湾の施設としては、夜間航行する船に江差湊の位置を知らせ、港内を照らして安全に入港するための常夜灯が、問屋や廻船業者によって沖の口役所および山之上町に各一カ所設置され、「かもめ島」の内側に岩盤^{うが}を穿って建てられた係船杭が並ぶだけでした。また、「かもめ島」には江差問屋・村上三郎右衛門(彌右衛門)によって給水用の井戸が掘られ、飲料水に利用されていました。

「かもめ島」の前に独特の形をした瓶子岩^{へいし}が建っています。瓶子とは古語で徳利のことを指し、酒を入れる器です。瓶子岩は岩の形が徳利を逆さにして酒を注いでいる様に見えることから名づけられました。その昔、予言者である姥^{うば}がかもめ島で翁から小さな瓶子を渡され、教えられた通り瓶子を海に投じたところ、江差に鯨の群来が現れるようになりました。その瓶子が海上に現れ瓶子岩になり、姥は折居様と呼ばれ神のように敬われるようになったという伝説があります。その伝説が、姥神大神宮の創基に繋がります。

毎年 7 月に開催されるかもめ島まつりでは江差の海の男たちによる勇壮な瓶子岩のしめ縄飾りが行われていました。瓶子岩の前に立つ赤い鳥居は、元和元年(1615)創建の「巖島神社」の建立 400 年記念に建てられました(地図⑥)。この神社は、もともとは「弁財天社」と呼ばれていた



「かもめ島」の「巖島神社」



江差商人の宴会が催された千畳敷(上)
鷗島灯台(左)

そうですから、弁財船の航海安全を願って建てられたと考えられています。境内には加賀の船頭たちが寄進した手水鉢があり、鳥居の柱には加賀国橋立の北前船の船頭たちが寄進した文字が刻まれていることから、加賀の北前船主たちと江差との強い繋がりがうかがえます。

瓶子岩のある海岸から島の上に通じる散策路を登りきると、頂上には青々とした芝生が広がっています。ここは毎年キャンプやイベントで賑わいます。その北側にある明治22年(1889)9月15日から点灯している鷗島灯台や、波の浸食により畳を敷きつめたような形になったことで千畳敷と呼ばれ、江差商人の宴会が開かれた岩場を眺めながらかもめ島を一周しました。港内側の岩場のところどころに北前船に係船する柱を立てていた穴も発見できます。

【開陽丸記念館】



江差町学芸員の小峰彩椰さん。
開陽丸に装備されていた長さ3.33m、口径22.5cm、重量4.2tの9inchダルグレン砲(アメリカ製)の前にて

開陽丸青少年センター前で江差町学芸員の^{こみねきや}小峰彩椰さんと待ち合わせ、旧幕府の軍艦・開陽丸の案内をしていただきました(地図⑦)。

小峰さんは神奈川県のご出身で、東海大学において考古学を学ばれ、江差町の学芸員になられて5年、調査の傍ら歴史教育や文化講演など



「開陽丸記念館」。その左は開陽丸青少年センター



開陽丸の大砲

幅広く活動されています。また、日本で最初の水中毒遺跡として注目を集めた開陽丸の保存・管理のため、潜水士の免許も取得しておられます。すでに中学生の時に考古学に興味を持ち始めていたと伺いました。

開陽丸はオランダのドルトレヒト市にあるヒップス・エン・ゾーネン造船所で慶応元年(1866)に建造された当時最新鋭の軍艦で、江戸幕府の旗艦でした。排水量2,590t、船長72m(ハウスピット含め81.2m)、スクリューを回転させる補助エンジンとして400馬力の蒸気機関1基を有する3本マストの帆船です。大砲は当初26門でしたが、のちに追加され35門が装備されました。慶応3年(1867)、大政奉還によって政治の実権が江戸幕府から明治政府に移ると、翌年に新政府と旧幕府軍との間に^{えのもとたけあき}戊辰戦争が勃発します。その最中、榎本武揚率いる艦隊8隻は品川沖より脱走して蝦夷島へ向かいます。途中、仙台で旧幕府軍の敗残兵、土方歳三、大鳥圭介ら約2,800名を収容して蝦夷地内浦湾の鷲ノ木(現・森町)に到着し、陸兵を上陸させた後、箱館に向かいました。その後、開陽丸は江差占拠の陸兵を援護するため江差沖に到着しますが、旧暦



砲弾を使って脱塩や保存処理の効果の程度を示す。左側の未処理から右側の完全な保存処理をした砲弾まで段階的に展示

11月15日夜半に暴風雨のため座礁、約10日後に沈没しました。

その場所是不明でしたが、昭和49年(1974)、



大砲発射の態勢を再現した模型



汽笛用タンク(手前)と海水を真水にする換水装置

江差港東外防波堤の建設後に開陽丸の遺物が発見されます。その現場周辺は周知の埋蔵文化財包蔵地に指定され、翌年から本格的な遺物の引き揚げが始まり、昭和63年(1988)まで調査が続けられました。わが国初的水中遺跡の水中考古学調査として注目を集め、遺物を引き揚げた後の脱塩処理や保存処理などすべての面で試行が重ねられました。

自然と歴史文化を大切にしながら街づくりを進める

江差町は、新たなウォーターフロント開発として海洋性レクリエーション基地構想を港湾計画に位置付け、中心施設である江差マリーナが平成元年(1989)に南ふ頭の南側にオープンしました。そのマリーナに隣接する海面に、鉄筋コンクリート造の開陽丸が原寸復元されて記念館としてオープンし、引き揚げられた遺物が館内(船内)に展示・保存されました。船内には当時の大砲発射の様子や、船長・船員の活動などが再現され、引き揚げられた遺物の展示と遺物の発掘作業工程や保存方法をビデオやパネルなどで紹介しています。引き揚げら



引き上げられた食器類やスプーンなど

れた遺物の中には大砲や拳銃の他に医療品や食器などもあります。

【江差追分会館・江差山車会館】

北前船によって運ばれたのは物資ばかりではありませんでした。追分節は、江戸時代から信州中仙道で唄われた馬子唄がルーツ。一種のはやり唄として全国各地に広まり、越後に伝わったものは船歌として船頭たちに唄われるようになって、今から200余年ほど前に北前船によって江差に運ば



「江差追分会館」

れてきたといわれています。さらに江差では、座頭佐之市がケンリョウ節と追分を融合させて独特の音調をもつ江差追分を誕生させたといわれ、それが多くの唄い手によって磨かれ、唄いつがれてきたのです(江差追分会館ホームページより)。

戦後の混乱の最中の昭和22年(1947)の夏、町内のあちこちに「江差追分会教授所」の看板が掲げられ、その2年後には江差追分会が再び組織的に強化され、新しい陣容で発足しました。関係者には多くの軍人遺族や被災者がおり、困難な生活の中にありながら郷土芸能の復活の意志は固かったといえます。江差追分こそは、自らの生命を呼び覚ます魂の歌であり、郷土復興の応援歌でした。

「江差追分会館」は、先人から引き継いだ、この地方文化の華を正しく保存伝承するため、昭和57年(1982)に町民や追分愛好者の厚意によって建設されました(地図⑧)。館内には、追分資料室・伝習演習室・追分道場等が設けられ、江差追分を心行くまで堪能できます(江差追分会館ホームページより)。この会館を中心に、日本各地のみならず世界各国に江差追分を教える支部が広がっています。

4月末から10月までの毎日、江差追分と地元北海道民謡の実演が行われ、さらにGWと姥神大神宮渡御祭期間中には餅つき囃子などの郷土芸能の特別実演も行われる舞台を、許可をいただき見学させていただきました。正面に江差屏風絵を描いた豪華な^{どんちょう}緞帳が下がり、三方の壁には歴代優勝者の写真が飾られています。見学当日も、30分後に江差追分の実演が行われるということでした。

そのあと、380余年の歴史を誇る姥神大神宮祭



江差屏風を描いた綴帳



姥神大神宮渡御祭の山車。

全 13 台のうち 2 台を 1 年交代で展示している

典を紹介した「江差山車会館」を見学しました（地図⑧）。正面に 2 台の山車が展示され、壁には 13 台の山車を飾る人形の写真と各山車で着用する半纏はんてんが飾られています。山車は 13 台の山車の中から 2 台を 1 年交代で常設展示されています。山車にはそれぞれ由緒があり、地区の宝物となっています。

蝦夷地最古の祭りと呼ばれた姥神大神宮渡御祭の起源は、ニシン漁を終えた後、豊漁に感謝を込めて行われる江差の夏のお祭りでした。江差では御輿よりしろに供奉する曳き山を「ヤマ」と呼び、屋台に高く青木（トドマツ）を立てて神の依代とすることを

「ヤマを立てる」と言い表します。武者人形、能楽人形、文楽人形、歌舞伎人形などを配した豪華な 13 台のヤマが、吹き流しや錦の御旗をひるがえし、流暢な祇園囃子の調べにのって町内を練り歩きます。現存する最も古い山車と水引幕は、神功山じんぐうやまのもので、宝暦年間（1751～1764）京都の人形問屋が納めたもの。北海道の指定文化財になっています。はるか遠い江差のニシン景気を現代に伝える夏の大祭です（江差町の観光情報ポータルサイトより）。

【いにしえ街道と旧中村家住宅】

江戸期の街並みを残す旧国道は〈いにしえ街道〉と呼ばれ、その通りにかつて北前船交易で財を成した「旧中村家住宅（国指定重要文化財）」と「横山家（北海道指定有形民俗文化財）」の建物が保存されています（地図⑨）。

すでに述べたように、松前三湊の問屋は単なる生産地と消費地の問屋ではなく、松前藩の沖の口業務（収税業務）を藩の委嘱を受けて代行する機関であり、その公的業務を利用して多角的に問屋、倉庫業、小売業などを営む特権商人でしたから、その家屋は店舗・船宿としての宿泊施設、顧客と応対する客間、家族生活のための居室、多くの使用人たちの居室、数棟の倉庫を備えた巨大な建物です。

「旧中村家住宅」の玄関を入り帳場で受付をしてから 2 階に上がり、展示してある江差屏風を眺めて往時の江差の繁栄を偲んでから階段を下り、母屋から奥へ向かいました。母屋に続いて文庫蔵（衣料・家財道具等の所蔵庫）・複数の倉庫等がかつての海岸まで連なり、それに野輮のざやと称する屋根が



廻船問屋・中村家。左奥が問屋ハネダン



「旧中村家住宅」の 2 階に展示された江差屏風（複製）



「旧中村家住宅」内部の展示物

かけられて通し庭として母屋に繋がっています。通し庭は海岸の勾配にそって階段状になっています。そこからさらに波打ち際にせり出した「ハネダシ」と称する掘立柱の木造 2 階建ての建物が接続します。その 2 階の床面の高さは通し庭の高さに揃えられ、着岸した弁財船や小廻船からハネダシの階段に「歩み板」を渡され荷物の積み卸しが行われていました。建物の内部は、用材の木組みに金属釘を一切使用せず、柱と梁の木組みは「鯖口^{さばくち}の梁止め」という耐震建築構造になっています。また、通し庭の上部には高窓を設け、客間・茶の間の庭側をガラス戸にして間接採光しています。これは北陸の豪雪地帯で一般にみられる様式です。茶の間の高い天井や欄間障子の造形は、関西の商家住宅に一般的にみられるものです。また、土台には北前船を安定させるバラスト（おもり）として福井から運ばれた笏谷石^{しやくだにいし}が使われています。このように江差の文化は、北前船によって運ばれてきた関西と北陸の文化を融合して築かれたことが理解できます。

【姥神大神宮】



桜の花が満開の「姥神大神宮」

旅の最後は、桜の花が咲き誇る「姥神大神宮」に詣でました（地図⑩）。社伝によると、かもめ島の瓶子岩が現出した伝説で述べたように鯨の群来があった後、姥は忽然と姿を消し、草庵に残されていた姥の祀る 5 体の御神像を、人々が小祠を建立し姥神としてお祀りし、後に姥も祀ったとあります。当初は津花町浜手に鎮座していましたが、正保元年(1644)に現在地に遷座、安永 3 年(1774)、姥の神霊は折居社として現在地に遷座されました。松前藩政時代には鯨漁業の祈願社として永久祈禱を仰せ付けられ、例祭には檜山奉行が派遣されていました。文化 14 年(1817)7 月には正一位姥神大神宮の勅宣額を拝戴しました（北海道神社庁ホームページより）。

【レストラン Satomi、宮寿司】

新緑と桜の花の彩が黄昏の中に溶け込み始めた頃、この日の楽しい出来事を思い出しながら夕食を予約していたお店「レストラン Satomi」へ（地図⑪）。地元でとれる新鮮な魚や野菜を使って盛り付けた料理に舌鼓を打ちました。ご夫婦と娘さんが経営する店内は、瞬く間にお客で満席になりました。

また、勝山館跡を見学した後、上ノ国町の宮寿司（地図④）で食べた昼のランチの海鮮チラシも新鮮な刺身と酢飯がマッチして美味しかったです。

（関口信一郎 記）



メニュー豊富な「レストラン Satomi」



地元の新鮮な食材を使った「Satomi」の料理



上ノ国町「宮寿司」の海鮮チラシ

【今回の巡回ルート】



①勝山館跡 → ②勝山館ガイダンス施設 → ③夷王山神社 → ④宮寿司 →
 → ⑤かもめ島 → ⑥厳島神社 → ⑦開陽丸記念館 → ⑧江差追分会館 →
 → ⑧江差山車会館 → ⑨旧中村家住宅 → ⑩姥神大神宮 → ⑪レストランSatomi

【今回の巡回ミニ情報】

地図①②

勝山館跡、勝山館ガイダンス施設

上ノ国町字勝山 427 番地

電話 0139-55-2400

開館期間 4月中旬～11月上旬

営業時間 10:00～16:00

休館日 月曜日、祝日の翌日

入館料 大人 200 円、小中高 100 円

地図③

夷王山神社

上ノ国町勝山

電話 0139-55-2230

(上ノ国町教育委員会)

※松前藩主の祖である武田信広を祀る神社。標高 159m の山頂からは市街の他、日本海や奥尻も望む。

地図④

宮寿司

上ノ国町字大崎 11-3

電話 0139-55-1005

営業期間 11:30～20:00

定休 不定休

※宿泊も可能(1 名 1 部屋 13,000 円、2 名 1 部屋 11,500 円)

地図⑤⑥

かもめ島、厳島神社

江差町字鷗島

電話 0139-52-6716

(江差町役場追分観光課観光係)

※檜山道立自然公園の特別区域に指定される小島のかもめ島には、北前船やなどに関する数多くの史跡や記念碑が点在する。

※かつて弁財天社と呼ばれた厳島神社の社殿両脇には八重桜が植えられ、春の美しい風景を演出。方向石の手水鉢や浪切鳥居遺構もあり。

地図⑦

開陽丸記念館

江差町字姥神町 1-10

電話 0139-52-5522

営業時間 9:00～17:00

休業日 4～10 月無休、

11～3 月月曜日、祝日の翌日

※令和 7 年(2025)11 月～令和 9 年(2027)5

月頃まで管理棟解体工事に付き休館

入館料 大人 500 円、小中高 250 円

※開陽丸に関する引き揚げ遺物展示の他に、大砲発射や操船シミュレーション、保存処理、ハンモックでの就寝などの体験もできるコーナーもある。

地図⑧

江差追分会館、江差山車会館

江差町字中歌町 193-1

電話 0139-52-0920

営業時間 9:00～17:00

休業日 4～10 月:無休、11～3 月:月曜日、祝日の翌日、年末年始

入館料 大人 500 円、小中高 250 円

※江差追分会館では、4～10 月までの毎日、江差追分の指導型実演がある(実演時間 11:30/13:00/15:00)。江差追分や姥神大神宮渡御祭の歴史や様子をまとめた映像を大型スクリーンで鑑賞できる。

地図⑨

旧中村家住宅

江差町字中歌町 22

電話 0139-52-1617

営業時間 9:00～17:00

休業日 4～10 月:無休、11～3 月:月曜日、祝日の翌日、年末年始

入館料 大人 300 円、小中高 100 円、満 70 歳以上無料

地図⑩

姥神大神宮

江差町字姥神町 99-1

電話 0139-52-1900

※姥神大神宮渡御祭は毎年 8 月 9 日から 11 日に開催される。

地図⑪

レストラン Satomi

江差町字中歌町 4-2

電話 0139-52-5514

営業期間 17:30～22:00

定休 日曜(祝日は要確認)

<連絡先>

NPO 法人 北海道みなとの文化振興機構

札幌市北区北 11 条西 2 丁目 2-17 セントラル札幌北ビル 5 階

e-mail アドレス mail@minatobunka-npo.info

ホームページ <https://minatobunka-npo.info>